



# 幻想と現実の ラプソデー



青い鳥

## 序

---

Nは平成20年5月で当年にとって74歳になる。昨今の聞きなれぬ言葉からすると、四月からの社会保険制度の改正で後期高齢者なる言葉が75才以上の区分に出現してきたからには随分と年月を重ねたと思わざるをえないのだが、然し、当人は一向に老いを感じてはいない。肉体的には生理上日々老いてゆくこともやむを得ないとしても精神的には青春時代と左程変わらず今も生きていると思っている。

未だ日常の仕事に従事しているのも楽しい心の支えになっているのかもしれない。今から新しい職場を探すとしたら年齢に対する社会的偏見の壁からまず不可能と言っても過言ではあるまいが、過去の経験と実績から引きずってきた仕事は加齢と共に社会情勢の変化も加わり、徐々に減ってはきたものの、沈み行く舟に乗っている感はあるものの過労で胃を悪くする心配も無くなり、当人は、これもむしろ感謝すべきことと受けとめている。

時に年相応の者が相寄れば話題は年金か病気の話である。せいぜい威勢がよいところでも新聞のスポーツ欄からの野球、相撲等々日常茶飯事的な新聞記事の範疇に終始するが、Nはその様な世間一般の俗事現象にはとんと無関心なのである。だから彼をあまり知らない周囲の人達からすれば話しにくい変人と映ずるかもしれない。或る知人が妻に“貴方のご主人の血液型A型?”と聞くと、“O型だけれど、傍目には神経質に見えても、なかなかあれで、脳天気で気楽なものよ。”と妻は答える。とにかく日常的な話題やニュースに本人は、とんと無関心なのである。当人が悩み苦しんでいることと言えば、他人が聞いたら多分、随分と馬鹿馬鹿しい事と思うことだろう。自分が自分に与えられた人生を生きるに値しない生きかたしかできなかつたことを悔やみ、現在の今もそれを乗り越える術も知らないことを悩んでいるのである。

或る人は、彼は野心家なのかと訝るだろう。だが彼が如何に説明しようとしても当人自身はつきり判っていないことなのだからなおさらに厄介である。…彼自身の悩みを自らに説き聞かせる為にこの物語は始まる。

## 虹の橋

---

Nは今日も人生という長い旅路を歩きつづける。自分が何処から何処へ向かわんとしているのか当人に知る術は無い。旅は辛く悲しいことばかりではない。のどかな陽射しのもと生きとし生ける者の讃歌とどろく日も少なくはない。柔らかな陽射、心地よいそよ風は元気をおだしと彼を慰める。小川のせせらぎに足を浸し彼は暫し楽しかった過ぎ去りし日々を懐かしむ。寄せては返す波うち際で、はるかに遠き地平線を眺める時、彼の胸は夢と希望で満ち溢れる。頭を抑えつけられるような冬の曇天のもとでは彼の頭の中は空っぽで夢は色あせ情操の心も干からびる。大地は足につかず、さりとて宙をさまよう事もあたわず眠ることもできないのに起きてもいられない。創造の才は努力も必要であるのに観念は納得してもその力は既に失せている。思いきり叫びたい。思い切り走りたい。だのに身体は動こうとしない。誰かが彼の閉ざされた心の扉をコンコンと叩く。“喜怒哀楽も時の流れの奏でる音楽の調べと心得てその流れに身を委ねなさい。”思考がストップして無心のままに身を保てたらと、彼は願う。時の流れは弛むことなく先へ先へと人を押し流してゆく。今日ある今も次ぎの瞬間には過去へ過去へと遠ざかる。生ある者は全てその命与えられし時からその流れに身を委ねいつしか命朽ち果てその流れの中に姿を消してゆく。心静かにその日を迎えたいと念ずるのはNばかりではあるまい。次ぎなる日記はそんな彼の願いを示している。

(公園のベンチの片隅に一人の老人が虚ろな目をして腰掛けていました。若き日の楽しい思い出にふけている彼に、道行く人は特に注意を惹くでもなく通り過ぎていきます。秋の柔らかな陽射しと木々の緑の中で老人の頭の中には楽しい夢が満ち溢れていました。やがて天空に美しい虹の橋が二本もかかりました。老人はあの橋をどんどん昇っていきたいなあーと思いました。そよ風がやさしく彼の耳元を奏でました。風の精が彼にささやきました。“昇っておいきよ。”と。彼はいくらなんでも昇っていくことは出来まいと思いました。突然、風の精は彼を幻想の世界へ引き寄せました。その瞬間、変化が生じた事に老人は気づきます。彼の身体にすばらしい力が加えられたことを。今まで出来なかった大空を自由にとび回ることも、遠くの美しい景色をはっきりと眺める事も、遠くで人の話す小さな囁きを聞くことも出来るのです。風の精は彼の耳もとで心地よい励ましの言葉を与えました。小川の水のせせらぎは静かな音楽を奏でました。老人はついに意を決し虹の橋を昇って行きました。地上がだんだんと遠ざかり、人も景色もみるみるうちに眼下に小さくなってゆくのが判りました。道行く若者の一人が、ふとベンチに座る老人の異常な姿に目をとめました。“この爺さん死んでいるよ。”と誰かが言いました。)

## 狼の遠吠え

---

Nは天気の良い日、近郊の山野に山歩きに出かけた。緑あふれ木漏れ日の射す木立の道を歩きながら、静けさの中で時折聞こえる小鳥のさえずりを聞きながらの散策は、彼にとって思索にふけるのには最適である。時は流れ、形あるものは、人も物も変化するが自然の奏でる美しさは今も昔も変わらない。

この山野にも人間が右往左往しなかった頃には色々な動物が生息していたのであろう。

“昔、この山野にも動物達が沢山住んでいた頃のお話。

或る日、村はずれのこの森に住む一匹の狼が猟師に鉄砲で撃たれました。然し猟師は射とめた獲物が、まだ幼い狼だと知ると可哀想に思いました。そこで狼を家に連れ帰り傷の手当てをしてやり、やがて狼が元気になると再び森へ放してやりました。

大人に成長してからも狼はその事をよく覚えていて、もう一度猟師の許を訪ね、その時のお礼を言いたいものだと思いました。然し、本当のところ狼は人間が怖くて仕方ありません。いつも人間を見ると一目散に逃げ出しました。これでは猟師に会う事などとても叶いません。どうしたものかと思案の末、森の一本杉に相談してみることにしました。森の一本杉は森の奥深き池のほとりに、もう3000年以上も聳え立っていました。人間や動物達が生きて、やがて朽ち果てるのを何回も何回もじっと見つめてきました。だから人間の事も良く知っているのです。一本杉は答えます。

(人間の赤ん坊の顔を覗いてごらん。とても可愛い顔をしているよ。生まれた時は皆な純真無垢の美しい心を持っているのさ。然し人間の心の中には善悪両面の心が住みついでいて、生まれた時は善き美しき心で満ちているが時が経ち成長と共に少しずつ変わってゆくのだ。善き心と悪しき心のどちらがどれだけ大きくなってゆくかは生まれつきの性格もあるけれど彼を囲む生い立ちの状況如何も大きく影響してくるだろう。だからどんな極悪非道の間人でもひとかけらの善き心も無いとは言いきれないし、どんな高僧・名僧と言われる人でも己れの心に潜む悪しき心、煩悩を絶つことは難しいと悩んでいるのさ。ただ平易に欲望のおもむくままに心を委ねた人間と知性を磨き悪しき心を抑えこまんと日夜努めた人間とは、心の有り様も随分と変わってくるだろう。だから恐ろしい猟師の中にもお前さんを助けたような心の優しい猟師もいるわけだ。然し、猟師の家に近づくのは、お止し。猟師が狼をみれば鉄砲で撃つだろう。昔、自分が助けた狼であると知る術もないのだから。それが時の流れというものさ。) 狼は大きく頷きました。その晩、村人は月光の冴える森の中から心に沁みるような狼の遠吠えを聞きました。狼を助けた猟師も、その遠吠えを聞きながら昔助けた狼は今も元気になっているだろうかと思いました。”

## 月夜の奇跡

Nは毎年飽きることなく紀州路を訪れた。正月、紀州白浜温泉白良浜の海岸を歩く。天気快晴にして澄みきった青空の下、どこまでも続く蒼き海原、彼方に伸びる水平線から繰り返し、繰り返し岸辺に打ち寄せる海の白波、冬の柔らかな陽射しを優しく  
跳ね返す白き輝きの砂浜でちらりほらりと人が遊ぶ。しばらくの岸辺  
の散策の後、海岸線を離れ温泉神社に向かう参道をゆっくりと登り頂上の平草原を目指す。森閑とした神社の境内を抜け暫らくすると眼下に見下ろす田辺湾の眺望、遥かに望む紀州の山々。もし天地創造の神々のこれが産物としたら何と浪漫的な杖の一振りであったことか。

時は随分と流れた。若い頃と今も気持ちのうえでは少しも変わらないと思っているのだが鏡に映る我が姿を見れば、これが自分かと思う程に老人になってしまった。肉体の衰えはどうしてもないが精神だけはいつまでも若若しくありたいものだと思う。もう大阪に来て何年になるだろう。ずいぶんと昔になってしまったが、Nがまだ25歳ぐらいの頃だったか、神戸の国立大を出て公認会計士試験にも合格し、ほっとしたところで試験合格年次の近い若い仲間と懇親会を作ってよく遊んだ。そんなこともあって、ある日、宗右衛門町辺りをぶらついていると誰かが後ろからポンと背中をたたいた。「すました顔をして歩いているのね。」振りかえるとS子が笑っていた。彼女とは別れて3年以上たっていたが会えば二人は懐かしさが先行して直ぐに元の二人に戻った。元来S子は陽気な性格なのでそのまま連れだって街を散歩したものの、未練がましい話をするでもなく、以前と同様彼を楽しませた。S子とは3年以上同棲したであろうか。彼女は彼より二つ年上であったから姉さん気取りで彼の面倒をみたものだった。「あんたは、私と知り合えてよかったわ。世間では水商売の女に男が騙されるなんて言われるけれど、私はあんたに尽くすばかりね。」と言うのが彼女の口癖だった。性格は天真爛漫陽気なものだが、大地にしっかりと根づいた生活は苦手の様でザルに水を入れるようなところもあったが、それでも彼の衣服の洗濯とか、食事の世話をしては「奥さんに成れるでしょう。」と言って笑っていた。道頓堀の西のはずれに“クラブ羽衣”と言う感じの良い店があった。彼が彼女と出会ったのは、その店であった。彼女は着物姿が良く似合い化粧した夜の顔はとても近づきがたい美人にみえたが、どういものか彼とは気が合ったらしい。店の客は、たいがいS子を口説きにかかったし、彼の連れも彼女宛ての手紙を彼にことづてたりしたが、然し結局の処、彼等は互いに合性が良かったものか急速に親密になってしまった。店へ行けば「早く帰らせてもらうから店の近くで待っていてね。」とそっと彼の耳に囁いた。店を出れば二人は互いに好きでたまらないという気持ちにあふれ世界は二人の為に輝いているようなルンルン気分浸っていた。

二人で店を出るといつも夜の宗右衛門町を東へ高津、生玉界限の夜の街をブラブラと歩き回った。当時のこの辺りにはまだ織田作之助の文学作品の世界が残っている感じがした。神社で手を合わすとS子が聞いた。「何を願ったの。」「なにも御願いなんかしないさ。神様だって人間の勝手な願い事をいちいち聞いてられないだろう。」「学のある人は難しい事考えるのね。」S子は笑った。

夜が更けるほどに街は静寂となり、点在する各家の灯りも一つ消え亦一つ消えていった。今夜も夜の精が、各家庭を回り人々の眠りを誘う道案内を務めることだろう。

“村のはずれの連なる山々が急に海に滑り落ちるようになっている急斜面の処に這いつくばるように一軒のみすぼらしい小屋が建っていた。その小屋に一人の若者がひっそりと暮らしていた。そそりたつ断崖直下の丘に立つと海は遠く水平線の彼方まで見渡せた。彼の少年期の終わりまでは祖母が生きていて優しい祖母の慈愛のもとで彼は貧しいが心豊かに育てられた。その祖母も何年前かに老衰で亡くなると、彼は天涯孤独の身になってしまったがその小屋を離れることもなく独り暮らしを続けた。月夜の美しい晩には海辺に出かけ寄せては返す白波の奏でる調べに耳を傾け暫しの時を楽しんだ。何時の頃からか砂浜に腰を降ろす若者の傍に一人の美しい女人が寄り添うようになった。

その人は容姿が美しいばかりでなく豊かな知性からほとぼしる心の美しさが常に若者を圧倒した。女人の語る言葉の全てが彼を暫しタイムトンネルの世界に引き入れ時の経つのをわすれさせた。そしてやがて夜も明けるころには女人の姿も消えていた。独りになってからも女人の残した言葉が、くるくる回るメリーゴーランドの如く若者の脳裏を駆け巡った。人は幻覚が生じるとき確かに平常では見えないものが見え、聞こえないものが、聞こえてくる。五感の働きが平常では考えられない機能を発揮する。感性は強力となり日常の生活から飛び出した若者は世の中を通常の人とは異なるレンズで見ることが出来るようになった。それでも有る程度の処で常軌を外さない自制が働き、周囲の人に不審がられることもなく毎日の生活をおくったが、折にふれては女人の言葉を思いおこし考えた。女人は語った。…自然界の森羅万象の諸現象は人間の人智をはるかに超越する法則に支配されています。人間はその優れた英知と不断の努力により物質文明を発展させ、やがては人間が自ら作り出した科学の力により自然を支配することも可能と考える時代がくるかもしれません。然し人間は常に自然界に存する法則の正確性に対して常に畏怖の念を持ち感謝の気持ちを忘れてはなりません。人間が科学の力によって真理の扉を開けば開くほど、それ以前に存在する自然の摂理の法則の正確性に畏敬の念をもたねばならないのです。然し森羅万象の諸現象には①人間が真理の本質を探究せんとする更なる合理的精神を必要とする領域、②人間の科学だけでは解明しえないはるかに人智を超越する領域、③核開発のごとく人間の精神の次元次第では自らを破滅に導く危険領域の事象が存在します。人間の頭脳で自然の支配も可能と考える者は哲学的思索の欠如から、これらの価値判断に異常に弱い側面をもっているのです。彼らは問題点に行き詰ると或る者はオウム真理教のごときオカルト集団に逃避するであろうし、或るものはじっくり時間をかけて思索せねばならないときに近代人のせっかちさから無理にでも独善的な結論をだしてしまうかもしれません。

20世紀までの機械文明の発達史の輝かしい足跡を振り返るなら人間の英知の優れていることはよく理解できます。道具又は機械の使用による頭脳の発達こそが、人間を他の動物から区別せんとする人間の自負であり、紀元前の狩猟時代、人間は自然が用意した食物を、ただ集めて生活の糧に利用しました。自然崇拜の自然の恵みへの感謝の気持ちを持ったのは当然と思われまゝ。先住民族たるアイヌ人や、アメリカインディアンの文化から大方の想像ができます。狩猟時代から農業へと移行するとき人間は自分が欲しいものを自然に用意させることを学びとりました。更なる道具又は機械の発明・改良は、人間に自然というものは人間の利益のために支配できるものであるという自信を持たせるに至ったと推測されます。後はそれに勢いずいて、この支配を更

に強めるために更に色々な道具と機械の分野の進歩・発展が促され今日に至る訳です。然し、輝かしい機械文明の発展とは裏腹に精神文明の歩み方はどうでしょうか。精神文明に華さかせたギリシャ・アテネの時代と現代を比較しても、むしろ退歩の道を歩んできたのではないのでしょうか。ソルジェニーツイン氏の言葉を借用すれば更に辛らつであります。(私達は未だに穴居時代の法則に従って生き続けている。人より頑丈な、こん棒を持っている者が正しい、という法則である。ところが私達はそんなことはないような振りをしている。私達はそんなことは知りもしないし、ついぞ思い当たりもしないというわけだ。あたかも文明の進歩と共に、私達の道徳も向上している、とでも言いたげである。) この歴史にみる輝かしい機械文明の発展と、どうかするとそれに匹敵しがたき精神文明の発展とのアンバランスこそが現在の人間にとって不幸な問題なのです。危惧されるのは人間がその尊大さをもって足を踏み入れてはならない畏怖すべき自然領域の存在を自ら気づかない恐れのあることです。人間が常に畏怖と畏敬の念を忘れず自然の尊厳を冒瀆してはならない領域が存在するのです。…

## 地獄の慟哭

今年も亦3月10日が巡ってきた。Nの両親と妹は昭和20年3月9日の夜に始まる東京大空襲で死んだ。当時小学5年生の彼は集団疎開していたので一晩に10万人が焼死という恐ろしい火の地獄を自身の目で直接見ることはなかったが、毎年この日が近づき新聞・テレビ・その他の催しで此のことがとりあげられると、いつも涙があふれ出る。今年の3月9日の夜も寒さが厳しかったが、その日は東京大空襲をテーマとする映画”戦争と青春”を見た後であったので、なおさらにその感慨が深かった。激しい爆撃の下で彼の両親は、猛火の中を近くのレンガ造りの小学校に避難したという。父は忘れ物をとりに再び家に戻ったがそのまま焼死したらしい。小学校には次から次へと押し寄せる人波でついに校門から火がはいり校庭も火の海となり、暑さに耐えかねプールに飛び込んだ人は寒中の水の冷たさでそのまま凍死したという。猛火は着衣を燃やし更に人間の脂肪そのものをも燃やし生きながらに人間を丸焼きにしたという。隣家のおじさんはプールの水を鉄兜でかぶりつづけ奇跡的に助かったと後に彼に語った。

“北風吹きすさぶ深夜、彼はいまだ昔懐かしいチンチン電車の面影を残して路面電車が走る夜の街並みを家路に向かってとぼとぼと歩いていた。すると向こうから彼の好きなチンチン電車がゴトゴト音を立てながらゆっくりと走ってきた。終電の時間は、もうとつくにすぎているのにと多少訝りながらも乗ってみることにした。薄明かりの中、車内には2,3人の乗客が乗っていた。なるべく自宅の近くの駅で降りるつもりでいたが窓から眺める周囲の光景は彼の日頃見慣れたものとは全く違う展開となり、そのうち彼は降りる機会を失くしてしまった。車内の乗客も、いつしか彼独りになっていた。そうこうするうちに電車は停まり動かなくなってしまった。{終点です。此処で降りてください。}と運転手が、彼に告げた。{此処は何処ですか。}と彼が、尋ねると。{此処は地獄の1丁目です。そうだ、あなたにこの時計をさしあげましょう。}と運転手が言って、古びた懐中時計を彼にさしだした。時計は、丁度夜中の1時を指していた。{この時計が4時になったら、再び電車が此処へ来ますから、それに乗って貴方は元の場所へ戻ることが出来ます。但し、それまでの間に貴方の傍に寄ってくる人が色々な事を話しかけてきても、それに決して返事をしてはいけません。もし返事したら貴方は二度と元の世界に戻ることは出来ません。}やがて電車は彼の視界から消え去り暗黒と静寂の世界に彼は独りぼつねんと佇んだ。暫くして耳を澄ますと、なんとも物悲しいすすり泣きが何処からともなく聞こえてきたかと思うと恐ろしい形相をした赤鬼が彼に近づいてきて彼の耳元で囁いた。{あんたかね。現世から来た人というのは。聞こえるだろう。深い悲しみとやり場のない憤りからの慟哭を。現世の人達は現世で散々悪いことをした者が因果応報で懲らしめられる為、この地獄へ送られると思っているだろう。ところがそんな恐ろしい地獄は現世そのものの中にあるようだね。物欲・金銭欲・色欲・権力欲・名誉欲等々、人間の赤裸々な欲望をむきだしに他人のことなど顧みず振る舞う亡者どもが現世にはたくさんいるからね。そんな亡者どものために、さんざん悶え苦しめられた結果、命を落とした者の深い悲しみと憤りは中々すぐに癒えるものではないのさ。今聞こえてくるのはそんな人たちのすすり泣きとも呻きともいえる慟哭さ。此処で、自分たちは彼らの心を癒すケヤクの役割を果たしているのだ。彼らが、かすかに差し込む仏の慈悲を受け入れ、その心が多少たり



とも癒されたら、それから極楽浄土の道に旅立つことになるのさ。あんたの両親も戦争という残酷な悲劇の悲しみに長く悲しんだ後に此処から極楽に旅立って行ったのだ。戦争では極限の飢餓状態から人肉をも食らう現世の生き地獄を体験して、ここへやってきた人間もいるよ。病気や自然災害等々色々な苦しみ、悲しみを背負って此処へくるわけだ。だが人間が自ら不幸を作り出している戦争は矢張りいけないね。古今東西尽きることなく世界の何処かで戦争はいつも行われている。国のためなる美名のもとに権力者が行う戦争なる人殺しは白昼堂々で行われる犯罪だよ。当然権力者は罪の意識もなく戦争の結果、勝者が正義をかざし敗者を裁いている。然も、近代戦になればなるほど武器も進歩、大規模、機械化して、市井の大量の市民を悲惨な死に巻き込むようになってきている。これら戦争で命を奪われた人達は深い悲しみとやりどころのない憤りを、いつまでもいつまでも癒されることなく此処に集まってきたのだ。だから此処はこんな人達の傷ついた心を癒す大切な処なのさ。彼らが戦争で失った幸せを再びその追憶の中に吹き込んで悲しみと苦痛を取り除いてやるのが自分たちの仕事なのだ。だから現世の人達が戦争で亡くなった人達に鎮魂の祈りを捧げてくれるのなら、まず戦争をしないことだ。平和時には戦争反対を唱える平和主義者もけっこういるが、開戦気運が盛り上がり、国家のためなる美名のもとに国家から戦争に行くことを強制されれば反対を叫び続けることはむずかしかろう。武器をもって脅しをかけて来る者に、目には目をと武器をもって戦う限り戦争はなくなるらないよ。だからといってインドの哲人ガンジーの如く素手による抵抗主義も計り知れない犠牲と試練が求められるだろう。現代の世界は核の支配による力の均衡で平和が維持されるとの考え方が支配しているようだがその核戦争がもたらす結果は人類の滅亡を暗示している。そしてリスクは、科学技術の進歩による顕著な武器の開発に比し、その核を制御する人間の精神構造が手斧をもって争った原始時代から左程進歩していない点にあるね。戦争は反対かと尋ねられれば大多数の人間は反対と答えるだろう。国家権力とかかわりのない市井の民衆はまして然りだ。だのに何故、戦争は無くならないのだろうか。平和を維持するためには戦争を起こそうとする開戦気運を生じせしめないような政治構造が大切なのではないだろうか。一部の為政者に権力が集中しすぎ、他方権力からほど遠い民衆の意思が、なかなか結集しにくい政治構造では為政者が誤って暴走を始めると戦争の危険が生ずることは必至だ。… } かくの如く赤鬼の話はとどまることなく続いたが、Nは何度も話の途中でうっかり相槌をうちそうになったが、そのたびに警告を思い出し生唾を呑みこんだ。Nはひとり心の中で思った。人間の持ちうる精神構造の限界をこえる権力が大多数の民衆から一部の為政者に集中し過ぎた独裁政権が永く続き、誤った暴走が始まると常に多くの民衆を巻き込む戦争が引き起こされてきた。然し現代はインターネットの時代だ。そのインターネットも元々は戦争目的で開発されたようだが、民間利用が進むと、情報は幅広く早く一般に浸透し、権力者の民衆に対するマインドコントロールはだんだんと難しくなっているから独裁者の暴走を許さなくなるのではなかろうか、いや独裁政権そのものを根底から覆すことも可能ではなかろうか。為政者が開戦気運にかたむきかけたとしても戦争を望まない大多数の民衆の意思が情報社会の進展の下では結集しやすくなり為政者の暴走をチェックできるようになればよいのだが…。そんな淡い希望をあれこれ思いめぐらすうちに、 やがて電車がやってきて再びNは車上の人となった。

## 幻想と現実のラブソデー

<http://p.booklog.jp/book/22536>

著者：青い鳥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/a5b6zz/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22536>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22536>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.